

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから専門的にお話しいたします！

わんにゃの健康最前線

「犬の腰痛にご用心〈パート1〉」



京都中央動物病院
院長 獣医師
村田 裕史 先生

寒い時期になると腰や膝がなんとなく痛い。こんな感覚を覚えるのは人間だけではないのです。わんちゃんも同じような症状を出す病気が様々あります。その中で代表的な疾患は椎間板ヘルニアです。今回はわんちゃんの椎間板ヘルニアについて書きたいと思います。

椎間板ヘルニアは腰と首に発生するのですが、どちらの部位への発生が多いのでしょうか？ その答えは腰です。そのような理由から、今回の記事は腰に発生する椎間板ヘルニアについて述べていきます。

次に重要なことなのですが、椎間板ヘルニアには好発犬種があります。これは椎間板ヘルニアになりやすい犬種という意味です。この好発犬種は、Mダックスが圧倒的です。また、次に、Wコーギー、フレンチブルドックと続きます。これ以外の犬種としては、Tブードル、パピヨンも経験しますが、やはり頻度は少なくなります。この犬種の差はどこから来るのでしょうか？ この知識は若干、難しい用語ですが、「軟骨異栄養犬種」と説明されます。この軟骨異栄養犬種は、非常に若い時から椎間板の水分量が減少し、石灰化が進行。その結果として、椎間板ヘルニアを起こしやすくなるのです。この軟骨異栄養犬種としては、Mダックス、シーズー、ビーグル、Wコーギー、フレンチブルドックなどが含まれます。ちなみに、ねこの椎間板ヘルニアは個人的には手術経験はありません。ねこの椎間板ヘルニアは、教科書的にもかなり少ないと言われており、自分の経験からも同感です。まれな症状ではありますが、ねこで椎間板ヘルニアのような症状が出た場合、腫瘍などが考えられますので、ねこについてもやはり注意したいところです。

今回はこの椎間板ヘルニアについて、このパート1では症状と診断。そして、次のパート2では治療方法と予後について述べ

ます。

症状

症状としては腰痛が代表的です。しかし、これがこの疾患の怖いところなのです。腰椎だけでなく神経症状である麻痺(図1)などさまざまな症状が出ることもある他にも、おしっこが出なくなる尿路閉鎖の症状、元気がない、食欲がない、どこか触ると鳴く、嘔吐や下痢などの消化器症状、震えるe.t.c.実にさまざまな症状を出すことがあります。同じ椎間板ヘルニアなのですが、なぜこのように様々な症状が出るのか？ これは椎間板ヘルニアの程度に関連しております。この椎間板ヘルニアの程度は非常に重要なポイントです。この程度の差は、グレード分類(表1)となっ



(図1)

グレード	症状・神経学的異常	補足
グレードI	背部痛・神経学的な異常なし	歩行できる
グレードII	歩行可能な不全麻痺	なんとか歩行できる
グレードIII	歩行不可能な不全麻痺	歩けない
グレードIV	麻痺・深部痛覚あり	歩けないし、排尿もできない
グレードV	麻痺・深部痛覚なし	歩けないし、排尿もできない。痛覚も完全に消失。

(表1)

ていて、このグレード分類は症状の差が出るだけでなく、治療方法や予後などに大きく関わってきます。

診断

先ほど述べたように椎間板ヘルニアは、尿が出ない、食欲がない、元気がないあるいは消化器症状などを呈する可能性があります。従って、このような症状を示す病気を椎間板ヘルニアの診断のために除外していく必要性があります。また、椎間板ヘルニアに特徴的な症状である腰痛であったとしても椎間板ヘルニア以外にも腰痛を生じる疾患も存在します。その点についても注意深く考えていく必要があります。その他にも神経症状である麻痺はどうでしょうか？ 実は椎間板ヘルニア以外にもそのような麻痺を生じる疾患があります。その点についても当然ですが診断し、治療方法を決定していくことが必要です。

次に、具体的にどのような診断ステップを行い、診断していくのかを述べていきたいと思います。最初にすべての病気について言えることなのですが、一番大切なのは症状と経過を確認することです。この部分は、実際に自分でわんちゃんを見て、触診などを行う身体検査や問診を取ることで、この部分をおろそかにすると、検査を間違った方向に進めることになるので、非常に大切

です。

この段階が終了すると、次のステップとしては全身状態の把握のために血液検査、そしてX線検査を行います。通常、椎間板ヘルニアであれば、WBC上昇やCRP反応性タンパク上昇などの炎症反応は認められませんが、しかし、椎間板脊髄炎であれば炎症反応が認められることがあります。次にX線検査を実施します。このX線検査では、椎骨の脱臼や骨折を確認できることがあります。腎結石や腹腔内疾患などが明らかとなることもありますが、残念なことに椎間板ヘルニアは単純なX線検査では診断できないことがほとんどです。椎間板物質が石灰化していない限り椎間板物質はX線には映りません。従って、これらの血液検査やX線検査は椎間板ヘルニアの確定診断と言いつわけては、それ以外の疾患の除外として全身状態の把握のために実施される検査ステップなのです。

ここまで検査を進めて椎間板ヘルニアを強く疑う場合、検査ステップを特殊検査に進めます。特殊検査と表現したのは、これらの検査のためにはわんちゃんに全身麻酔が必要となるためです。従って、この検査に進む前に、全身状態をしっかりと確認し、全身麻酔が実施できるのか？ そして、本当に椎間板ヘルニアを含む神経疾患であるのか？ などを最初の検査ステップで確認していることが重要です。

特殊検査とは具体的には、X線脊椎造影検査、CT検査、MRI検査、脳脊髄液検査となります。これらの特殊検査が、椎間板ヘルニアに対してすべて必要なわけではありません。それぞれの検査にはメリットデメリットがあるため、どのような検査を選択するのかが担当している獣医さんとよく相談していく必要があります。個人的には、血液検査とX線検査の後の特殊検査としてはMRI検査を選択します。このMRI検査により、椎間板ヘルニアと同じような症状を出すその他の神経疾患の除外、椎間板ヘルニアの位置(どの椎間か、左右どちらか)、圧迫の程度、脊髄の状態などの情報を得ることが出来ます。このような情報を加えて、症状のところで述べたグレード分類、治療に対する反応などを総合し、内科治療をするのか、あるいは、内科治療だけでなく外科治療を行うかを選択しております。もし、外科手術を実施する場合は、MRI検査による椎間板ヘルニアの位置情報は非常に重要であり、この情報により正確な手術が可能となります。

最後に

今回は椎間板ヘルニアについて、症状と診断について記載しました。次のパート2では、治療方法と予後について書きたいと思えます。

〈お問い合わせ〉 京都中央動物病院 電話 075-821-1020 京都市下京区柿本町582-3 9:00~20:00